

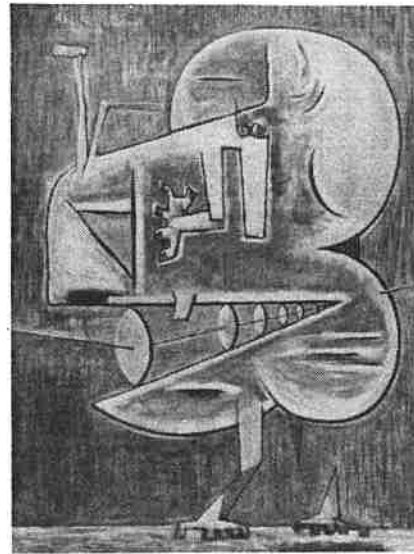
福竜丸だより

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

第五福竜丸をとらえる……

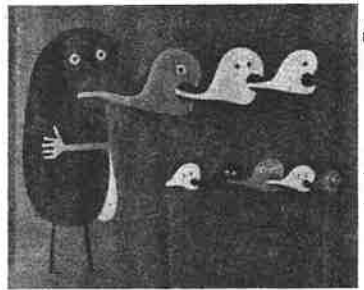
作品紹介③
鶴岡政男



高崎出身の鶴岡政男(一九〇七〜一九七九)は、十五歳で、太平洋画会研究所に入り、絵の道を進む。一九三七年召集され、中国へ騎兵として出征する。彼は、捕虜の銃殺を命じられた時があった。わざと狙いをはずして撃ったが、

他の銃弾で捕虜は死んだ。その後彼の属した小隊は全滅したが、彼だけは乗馬のケガのため生き残った。この二つの戦争体験は彼の「原罪感」になったといわれている。一九四三年、除隊後の鶴岡は、露光、井上長三郎、寺田政明、麻生三郎、松本峻介らと新人画会を結成する。絵の具も配給の時代であった。多くの画家が戦争画に協力する中、彼らは、軍国主義的風潮にたいして、あくまでもヒューマニズムな立場から、じつと作品を描き続けた。戦争末期に三度開いた展覧会でも、戦争と無縁な芸術性を貫くことで、抵抗の意志を示し続けた。だが、彼の作品は、一九四五年三月の東京大空襲で全焼してしまう。

鶴岡は、常に社会的なものに関心をもち続けた。原水爆にたいしても、「一瞬に何百万の人間の生命をうばう兵器の研究にぼつとついている科学者があり、それを製造する工場の経営者があり、また雨(一九五四年)



出口はどこ(一九六五年)

それを注する文すの政の首脳者がいる。彼らも人も類社会の平和や、繁栄を願うその信念を持っているとしたら、彼らはいずれも狂人であるし、さもないければ世界的狂悪犯人である……。狂気と、暴力と、謀りやくに満ちたこの原水爆時代に、絵画が今日の芸術であるためには、社会的現実と無関係であるはずはなく、対立するところにこそ、関連が生じるのだと思う」と語っている。そして、原爆をテーマに『人間気化』(五三年)を、第五福竜丸が被災した時、『雨』(五四年)を制作している。作者のいう「歴史的、人為的な放射能のある雨」は、墨でデッサンされた線と押された色彩で描かれ、生存の不安を漂わせている(S)。

軍縮問題に情熱を傾け人一倍の勉強を

川崎 昭一郎

第三回国連軍縮特別総会のアウトラインは準備委員会の勧告(一九八七年六月六日)にもとづき、第四回国連通常総会(一九八七年九月)において決定された(十一月三〇日、決議42/40)。

第三回国連軍縮特別総会は第四回国連通常総会(一九八八年九月)に先立って、一九八八年五月三一日から六月二五日まで、ニューヨークの国連本部で開催される。

第三回特別総会の実質議題としては現在の国際情勢を、とくに、軍備競争の終結という決定的に重要な目標および軍縮の分野での実質的前進を達成する火急の必要にたいして、再検討し評価することのほか、以下の諸項目があげられている。

- 第一回国連特別総会の最終文書で確立された諸原則を考慮に入れて、適切で具体的実質的な諸措置を綿密に仕あげるため、軍縮過程に関連する質・量両面を含む発展と傾向を評価すること
- 軍縮分野における国際連合の役割および軍縮機構の有効性について
- 軍縮分野における国連の広報・教育活動、軍縮に賛成する世界世論を動員する諸措置を含む
- 適切な形式での第三回特別総会(諸)文書の採択

- 通常軍縮(決議42/38E)・軍事問題に関する客観的情報(42/38I)
- 軍備制限、軍縮諸協定の遵守状況(42/38M)・地域的軍縮(42/39E)・世界軍縮会議(42/41)・検証、そのすべての側面について(42/42F)・(国連)軍縮委員会の報告(42/42G)・(ジュネーブ)軍縮会議の報告(42/42L)・インド洋を平和地帯とする宣言の履行状況(42/43)・軍縮と開発の関係(42/45)
- 第三回国連特別総会へのはたらきかけは、自国政府を通ずるか、国際NGOのネットワークによってなされる。
- この総会に軍縮に関してならぬかの貢献をしたと思うものにとつては、上に出てくるような国連の諸文書を一読しておくこと、最近十年間における軍縮の交渉と協定の主なものについて内容を理解していること、当面する軍縮の諸問題に関して自分の判断と意見をもてること、が最小限求められるであろう。
- 軍縮問題のバブリシティは現在のわが国ではまだ成功していない。したがって、軍縮に生きようとするものは、自分の本業にたいするのにおとらぬ情熱を傾けて人一倍勉強しなくてはならない。(千葉大学教授・第五福竜丸平和協会理事)



理事会・評議員会開く
三月二十八日協会の第82回理事・評議員合同会議が学士会館で開かれ、昭和63年度事業計画、予算を決定しました。また会議終了後村上悠紀雄氏(放射線安全技術センター)を講師に懇談しました。

岐阜の中学校から卒業作品
「卒業を前に学級のまとめ、私たちの心をお伝えします」と三月二十九日、岐阜県羽島郡笠松中学校三年五組のみなさんから、鶴のモザイク画、文集、カンパが届けられました。昨年六月、修学旅行で来館の後、文化祭で福竜丸の劇を発表、全校によびかけ第五福竜丸を知る会を作ったと喜んでくれました。S先生が上京の折持参されたモザイク画は船を中心に数千羽の折鶴で空と海と放射能に汚染された海流を色彩豊かに浮きたたせた芸術品。カンパも雲空の円にのびりました。

ソビエトから視察団
同じ日、ソビエトの友好視察団の一行約百人が来館。本多理事の説明のあと核兵器全廃を実現しましょうなど意見交換。オーロラ号と福竜丸のバッチを交換するなど交流がすすみました。



写真集を手にベン・シャーンの思い出を語る浅野竹二氏 (左)

ベン・シャーンと浅野竹二先生

室 伏 哲 郎

ひとの一生は短い。仮に百歳まで生きるとしても一日二四時間、一年三六五日で八七六〇時間、百年で八七六〇〇〇時間、閏年を加算しても百年間でこれに僅か六〇〇時間を足すだけの寿命なのである。しかも、この短い生涯のうち睡眠、食事、その他日常の雑用に時間を食われるから、人間が仕事や他人との交際に使える時間はグンと少なくなる。専門的な計算方法はあるだろうが、まあ、目の子算でも普通の人間なら全生

涯の約三分の一の三万時間くらいしかないんじゃないか。まして、他人との会話、談笑、交際だけに限れば、それに費やす時間なんてものは、それこそ、ほんの一握り。だからこそ、人生五十年だった昔、茶道の心得として「一期一会(いちごいちえ)、つまり、人間が相会って一杯の茶を喫し、こころを通わせるチャンスは、いま、この時限りで一生に一度しかない(だから、この貴重な会合をこよなく大切にしよう)」という言葉の重みが、寿命倍増の今日でも胸にズツシリ応えるのであろう。

さて、長いこの前置きから私は何を言いたいのか。ズバリ、去る三月二十二日、東京銀座の「ギャラリーきく」(番・五七一〇九〇)で開催された浅野竹二先生の木版画個展のオープニング・パーティでの先生との九年ぶりの対面という私事であり、そこから派生したちよっぴりの公事についてである。ひとと知る、浅野先生は京都木版画界の最長老で、一九六〇年にベン・シャーンが「第五福竜丸シ

リーズ」の取材で来日した折、ただひとり「会いたい」と自宅を訪問し、その作品を激賞した不世出の鬼才画家である。

その後、浅野先生は米国のベン・シャーンの自宅を訪問、来日の時、シャーンにアドバイスされた「名所版画(浅野先生が若い頃から長年手掛けておられた頒布会用の彩色木版)」と自由版画(需要とは無関係に自由に自刻自刷する、当時はモノクロの木版画)の結婚ができました」と新作を差し出したら米国画壇の巨匠は「オオ！できた！」といって我が事のように喜んでくれたという。

じつは九年前の夏、当時ある美術雑誌の編集人・編集長をしていた私は、浅野先生のアトリエ訪問を企画し、京都上高野の自宅に先生を尋ね、前述のようなベン・シャーンとの出会いの話も含めてインタビュー記事を書き、その後それを単行本にも収録したのだった。それから、私は雑誌のための随筆や自著「版画事典」所載のためのデータや図版を先生にお願いしたり、京都へ出張した時、京都高島屋での先生の個展を拝見したり、(先生にはお会い出来なかったが、

(作家・美術評論家)

平和随想 (五)

三宅 泰 雄



ビキニ水爆被災事件のあと、科学者たちは第五福竜丸の船上に降りそそいだ「死の灰」の分析や、魚の放射能測定などに忙殺されていきました。俊鶴丸によるビキニ海域の放射能調査という大事業も行なわれました。

そのうちに、こんどは本土にも放射能雨が降りはじめ、水、野菜、食品までが、放射能で汚染されるというさきわざになりました。

これら異常事態の研究、調査の結果は、日本学術会議に集められ、一九五六年に「核爆発実験の影響に関する研究報告(英文)」として、日本学術振興会から出版されました。この報告書は上、下二巻に分れ、報文数二〇四編。ページ数はあわせて一八二七ページという膨大なものです。報告書にはビキニ事件だけではなく、広島、長崎の

原爆関係の医学的な研究成果もせられていきます。

日本の科学者が、科学技術の犯罪的な産物、原水爆の出現を憂慮し、苦慮したのは当然のことといえます。ビキニの「死の灰」の分析結果は、はやくも、一九五四年五月末に、京都で開かれた日本分析化学討論会で発表されました。発表は東大、金沢大、大阪府立大、静岡大の研究者によって行なわれました。その結果は、アメリカが最高の秘密としていた、ビキニ水爆の構造を解くカギのすべてを内蔵していました。

閉会にあたり、座長の石橋雅義博士(京大教授)は「われわれ日本人は世界に率先して、核実験の禁止を叫ぶざるをえません。それは米国にも、ソ連にも強く言いたい」と述べ、その直前に日本学術会議が提唱した、原子力平和と三原則の支持を訴えました。参会者全員が、満場の拍手でこれにこたえ、この歴史的な集会は終りました。

この他にも、多くの科学者が核兵器の反対を唱え、核兵器の禁止について声明を発表した学会も少なくありませんでした。

しかし、国内で核兵器問題を主題として組織された科学者の集会

としては、科学者京都会議が、そのはじめではなかったかと思えます(一九六二年)。これについて開かれたのが「原水爆禁止科学者会議」でした。その第一回は一九六六年夏に広島で催されました。呼びかけ人は古在由重、末川博、新村猛の諸先生をはじめとする十七人の科学者で、私もその一人でした。

この会議が計画されたのは、その背景に、当時ベトナムに対するアメリカの侵略的軍事行動が、ますますエスカレートし、核戦争勃発の危険性があつたからです。

第一回会議声明の最後は「われわれ日本の科学者は全国的統一を強め、科学者の国際連帯を強化し、全世界人民の運動とかたく提携して、アメリカのベトナム侵略戦争に反対し、核戦争を阻止し、核兵器の完全禁止を実現するために努力することを、ここに声明する」と結ばれています。

「原水爆禁止科学者会議」は毎年一回づつ開かれ、第九回までつづきました。そして一九七五年以降は、その任務を「核兵器禁止をねがう科学者フォーラム」にゆずりました。フォーラムの世話人代表は、江口朴郎、小川岩雄、小野周、田畑茂二郎の諸氏と私の五名

◇

また、「浅野竹二木版画集」の推薦文を依頼されたり、なんやかんやと細かい交流はあったものの、お目にかかるチャンスがないまま歳月が流れた(二二〇〇時間)も経ったのだ。

しかし、どこか心に残る浅野先生のユニークな木版画の展覧会を首都圏で開催できたらとの念願を昨春秋、口に出したら、前記「ギャラリーきく」の山元清則社長が快く引き受け、「先生をお招きして心暖まるオープニング・パーティをやり、ベン・シャーンのゆかりもありますし、売上の一部をビキニ被災者のチャリティにさせていただけたら」とキッパリ。

パーティ当日はあいにくの豪雨に見舞われたが、町田市立国際美術館久保貞次郎館長など多数来場、今年米寿を迎えられるが「ボクは五一歳」が口ぐせのお元気の浅野先生を囲んで盛会だった。私もその前後、先生と食事した時間も加えた前後約五時間、「一期一会」の歓に酔い、それがチョッピリ清福にも通ずる時間をエンジョイさせて頂いたことだった。